http://aosa-eye.org

# アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

## 2018 年活動報告（2018 年４月～2019 年３月）

No.11

2019 年 4 月発行

（2018 年６月、シャイシャイにて）


アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
第 11 回モザンビークアイキャンプ日記 …… 内藤　毅４
モザンビークが与えてくれた視点 ……長澤利彦５
AOSA 2018 アイキャンプ……野口三太朗６
２回目の XaiXai アイキャンプ……沼田美紀７
「ちょっと疲れました」 ……宝山晶子８
初めてのアイキャンプ活動 ……田上純真８
６回目の海外医療支援活動 ……石飛直史９
アイキャンプ参加報告 ……植原正雄10
アイキャンプ報告 ……葛巻あゆみ11
アイキャンプに参加して ……塚原早祐佳11
アイキャンプ報告 ……庭野晴香12
アイキャンプ報告 ……佐門慧苑13
Ⅲ．2018 年度事業報告 ……13
Ⅳ．2018 年度会計報告 ……15
Ⅴ．2019 年度事業計画 ……16
Ⅵ．2019 年度予算 ……17
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……18
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……19

（アイキャンプ終了時の記念写真、2018 年６月、シャイシャイにて）

## Ⅰ．巻頭言

### 活動の第二期

**AOSA 理事長**
**徳島大学国際センター　内藤　毅**

モザンビーク共和国（以下モザンビーク）への眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）を設立し、現在までに毎年アイキャンプを無事行うことが出来、合計約 1,700 名の失明患者さんの手術を行うことが出来ました。
これも皆様方のご協力があったからこそだと、大変感謝しています。

現在までの約10年間の活動では手術を行うとともに、モザンビーク人眼科医の技術指導を行って来ました。そして去年から我々が技術指導してきた眼科医がシャイシャイに赴任して白内障手術を開始しました。活動開始から 10 年経って、やっと効果が出始めたということです。前々から国際協力活動は継続することに意義があり、結果が出始めるのには10年はかかると思っていました。したがって活動第一期の10年が終了し第二期に突入したと思います。

それでは活動をより発展させるために第二期には何をすべきか？ 我々の目標はモザンビークの失明状況の改善であり、年に１回の我々のアイキャンプでは問題の解決にはほど遠いと思われ、モザンビーク人眼科医たち独自でアイキャンプを行えるようになることが重要です。そのためには人材強化とともに医療機材の確保が必要となります。モザンビークの眼科医数は徐々に増えてはいますが微々たるものですが、一人一人の技術威力を高めることで問題解決に近づくと思います。

しかし、モザンビークの厳しい経済状況は一向に改善の兆しは見えず、混迷している状況です。このため医療機材が欠乏しています。失明者の開眼治療は経済格差是正に直接繋がる事であり、今後のモザンビーク政府の取り組みに期待するところです。この点に関しては引き続きモザンビーク政府関係者に訴えていきたいと思っています。特に今年は日本でアフリカ開発会議（TICAD）が開催されますので、アフリカの近隣諸国が連携し、彼らが意欲的に問題解決に向けて取り組んで欲しいと願っています。

モザンビークの現地事情により、しばらくはシャイシャイでのアイキャンプが続くと思われます。シャイシャイには去年と同様に我々が支援し独り立ちした眼科医がいます。モザンビークの医療状況の改善に向けて、彼らと一緒に考えていきたいと思っています。以前から現地の問題はモザンビークの人々で解決して欲しいと願っていますが、現実は厳しいようです。

微力ながら日本の代表の一人として国際貢献する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（シャイシャイ病院に到着）

（輸送した荷物）

## Ⅱ．活動の現場から

### 第 11 回モザンビークアイキャンプ日記

徳島大学国際センター　内藤　毅

６月５日(火)関空、成田～ドバイ～ヨハネスブルグ
６月６日(水)ヨハネスブルグ～マプト
６月７日(木)マプト～シャイシャイ
６月８日(金)～６月１１日(月)アイキャンプ
６月１２日(火)撤収
６月１３日(水)マプトへ移動
６月１４日(木)マプト～ヨハネスブルグ～ドバイ
６月１５日(金)ドバイ～関空、成田

2018 年のアイキャンプは再びシャイシャイで行うことになった。厳しい医療状況のシャイシャイで行うことは有意義であり、しかも我々が技術指導して来たモザンビーク人眼科医が独り立ちし、シャイシャイ病院に赴任した後の記念すべきアイキャンプである。

しかし、前回同様、船便で送った荷物の行方が追跡できなくなり、なかなか現地に到着せず、大変気を揉んだ。結果的には出発直前には無事届いたが、出発の時点ですでにかなり疲れていた。

６月５日（火）夜、20 時に関空に集合した。今回はツカザキ病院の長澤先生、野口先生、視能訓練士の石飛さん、そして種子島から田上先生が参加してくださった。また、モザンビーク現地コーディネーターの宝山さんの知り合いの佐門さん（関西学院大学２年）が一緒に行くことになった。関空には大阪の井口さんが見送りに来てくださった。我々の便よりも早く、成田からは看護師の沼田さんが飛び立ちドバイで落ち合うことになっている。

６月６日（水）早朝のドバイに到着。しばらくして沼田さんに会うことができ、ドバイで全員集合となった。飛行機を乗り継ぎ夕方にはヨハネスブルグに到着した。ヨハネスブルグでさらに飛行機を乗り継ぎ、夜 9 時にはモザンビークの首都マプトに到着した。ここまでは順調な旅であった。今まで順調に来ることが少なかったため、きっと何かあると思っていたら、案の定荷物が一個出て来ない。今回のアイキャンプのために新たに買ったハンディレフケラメーターである。こんな事もあるだろうと予想してレフケラ本体は携行していたが、キャリングケースと付属品を梱包した荷物が行方不明である。おそらくヨハネスブルグであろう。ヨハネスブルグ空港では今まで荷物が抜き取られるなど何回か酷い目にあって来た。前もって一番大事な本体を抜き取って携行したのは正解であった。荷物紛失の手続きを行いホテルにチェックインしたのは夜 11 時近かった。

６月７日（木）晴れ、雲ひとつない快晴である。日本は梅雨入りしたばかりであるがこちらは乾季である。しかも南半球で冬なので肌寒い。時差ボケのためか熟睡ではなかったが早朝に起床し、シャイシャイへ移動に向けての準備をした。午前 9 時にホテルを出発し、モザンビーク人眼科医、青年海外協力隊員たちとの待ち合わせ場所を回りながら、シャイシャイへ向けて出発した。シャイシャイには午後 2 時前に到着。早速病院へ行き、持ってきた医療機材を運び込み院長たちと面談して日程を終了した。昼食を食べていなかったので夕食を早めに取り、明日からのアイキャンプに備えて早々と就寝した。

６月８日（金）晴れ。早朝に宝山さんから紛失していた手荷物が見つかったと連絡があった。宝山さんの知り合いがマプトを早朝に発ち運んで来てくれるとのこと、大変有り難い。9 時前に病院に行ってみると既にたくさんの患者さんが待っていた。現地のモイゼス先生は事前に 300 人の患者さんを集めたと言っていた。また、宝山さんの知り合いが荷物を持って来てくれていた。荷物が無事でほっとした。

（待っていた大勢の患者さんたち）

眼科外来で診察のため器材設定を行い、診察を開始したのは午前 10 時頃であった。診察で白内障手術が必要な患者を振り分け、バイオメトリーを行い眼内レンズのパワーを決定した。合計約 250 人の患者を診察し 220 人の白内障手術患者を選択した。患者診察後は手術室で設定を行った。アイキャンプも長年続けていると手馴れて来て手順がスムーズである。手術器具の滅菌を依頼して午後 6 時過ぎに日程を終了した。

６月９日（土）晴れ。朝 8 時に病院に到着。早速手術の準備に取り掛かり、10 時に手術を開始した。まず長澤先生と野口先生が始め、今回初参加の田上先生が手術に加わった。長澤先生と野口先生はモザンビークでのアイキャンプには慣れているのでどのような患者にも対応できる。私は後方支援に努め昼食交代の時のみ手術を行った。休まずに手術を行い午後 6 時半頃には 70 人の白内障手術を終了した。手術器具を洗浄し翌日の手術に備え滅菌を依頼して手術を終了した。

6月10日（日）晴れ。毎日快晴である。病院に到着して最初に外来へ行き、昨日手術した患者さんの回診を行った。患者さんも我々も緊張する一瞬である。両眼失明した患者さんを優先して手術したため、最初の回診は特に緊張する。手術結果は概ね良好であり笑顔が溢れる。再び見えた喜びの余り踊りだす患者さんもいた。回診後は早速手術準備に取り掛かり手術を開始した。午後6時前には78人の手術を終了した。手術器具を洗浄して日程を終了した。

（手術風景）

6月11日（月）晴れ。昨日と同様に手術後の回診を行った。ほとんどの患者さんが視力を回復し良好な結果であった。回診後、早速手術準備をしたが、小児の白内障手術を全身麻酔で行うため準備が煩雑であった。また、テレビ取材などがあり手術室は賑やかであった。テレビ局のインタビューには白内障手術の重要性を説明した。

（手術中のモイゼス先生）

モザンビーク人眼科医のモイゼス医師に手術を教えようとしたが、恥ずかしがってしようとしない。どうもたくさんの人に囲まれて手術をするのが嫌なようだ。しかし、最後の患者さんは彼にやってもらった。彼の技術をチェックしながら無事手術を終了した。夕方には72人の白内障手術を終了し、手術器具の洗浄、物品の梱包に取り掛かった。モザンビークは医療器材が乏しく、ナイフや粘弾性物、眼内レンズなどを寄贈した。

6月12日（火）晴れ。まず手術後の回診を行ったが視力を回復した喜びで賑やかである。感激のあまり踊りだす患者さんや泣き出す患者さんもいる。しかし中には手術後すぐに見えず落胆している患者さんもいるが、少しずつ見るようになると説明し納得してもらう。回診後の記念写真は大変賑やかであった。物品を最終的に梱包し、全ての日程を終了した。みんなで病院長にお礼を言って病院を後にして、シャイシャイから1時間半ほどにあるリゾートホテルに宿泊した。

6月13日（水）晴れ。午前中にマプトへ移動。在モザンビーク日本大使館の方々と昼食をいただいた。昼食後、日本が建設中の火力発電所の建設現場を見学した。この発電所はモザンビークで産出される天然ガスを使い、最新の技術を駆使した効率の良い火力発電で、これが完成するとマプト市内の電気は安定するとの説明であった。その後、JICAモザンビーク事務所を表敬訪問し、今回のすべての日程を終了した。

6月14日（木）帰国の途に就く。

6月15日（金）無事帰国。

今回も無事アイキャンプを終える事が出来ました。これも参加していただいた皆様方のご協力、特に現地コーディネーターの宝山さんのご尽力によるものです。また、ご寄付いただきました方々、ご支援ご助言いただきました方々に深謝いたします。

## モザンビークが与えてくれた視点

ツカザキ病院　長澤　利彦

アイキャンプの報告は他のメンバーに譲るとして、今回は我々が愛するモザンビークを紹介したいと思います。

モザンビークは8世紀頃よりすでにアラブ人が金銀を求めて現れるようになったといわれていますが、本格的に世界（主にヨーロッパ）に知られるのは1498年、あの教科書で登場するヴァスコ・ダ・ガマがモザンビーク島に到達したことがきっかけでした。その後、1752年からポルトガルによる統治時代が続きます。1962年にモザンビーク解放戦線が結成されると1975年6月25日に独立国家となります。しかし、以後17年間による内戦が続きます。1992年10月4日ローマにおいてモザンビーク包括和平協定が調印されようやく内戦が終了します。

最近の国内の経済に目をむけるとAOSAの活動が始まった時の経済成長率は7%前後で推移(日本1.7%)と急成長していましたが、2016年には3.6%と低下、失業率は24.5%（2017年：世銀）（日本2.4%)と近年は厳しい状態です。これには理由があり、2016年4月にIMF（国際通貨基金）がモザンビーク政府

に 10 億ドル超の債務の報告漏れがあることを発表したことです。EU の中でさえ、また日本の一流企業の中にも債務申告隠しがあるので驚きませんが、途上国で問題になるのは、その後の信用不振により海外からの支援金不足におちいることです。ここ最近は交通取り締まりも不必要に多く感じていた理由がわかります。国民から少しでも多く徴収しようということです。近年の急成長は 2000 年代後半から開発が始まった北部テテ州における石炭開発事業であり、今後のモザンビーク経済にとって最も影響の大きいプロジェクトは、タンザニア国境に連なる北部カーボ・デルガド州沖合のロヴマ沖合鉱区の天然ガス開発です。この開発には日本の三井物産もかかわっています。しかし、ここに来て、LNG プロジェクトの将来も万事快調とばかりはいえなくなってきました。それはモザンビーク政府の対応の遅さと LNG 需給の緩みや石油ガス価格の低迷が LNG 事業の早期実施への逆風となっているようです。とはいえ 10 年前にはなかった豪華ホテルや高架橋の建設があちこちでみられます。そのほとんどが中国資本であり、巨大な中華パワーを肌で感じることができます。超大国アメリカであっても恐れるはずです。

（手術患者の回診中の長澤）

政府や社会に国民が不満を持つことはいつの時代であっても万国共通ですが、それでも現地のモザンビークの方々はたくましく生活をされています。今ではアフリカの奥地にあっても目まぐるしく社会は変化しています。私の母親が携帯電話を持っていなかった 10 年前に医療もまともにうけられないアフリカ奥地の多くの方々がすでに携帯電話を持ち歩いていた姿で特にそう感じました。モザンビークに行かせていただくことは森、山さらにはジャングルを見るような視点になることもあれば、木よりも小さなもの、つまり我々の草の根の活動の視点になることもあります。目の前にある小さな点である我々の活動を続けることが数年後に振り返ることで線になり、いずれは林程度になればと信じています。

## AOSA　2018　アイキャンプ
### ツカザキ病院眼科　野口　三太朗

今年も AOSA のモザンビークアイキャンプに参加させていただく機会をいただいた。今年は種子島から田上先生が盲腸を乗り越え参加していただいた。また、関西学院大学の学生さんである佐門さんも見学に参加された。井口さんは参加されず、関西空港まで見送りに来ていただいた。一年ぶりに内藤先生、井口さんとここで会うことになるが、一年の時間の経過を感じないほどいつも通りの会話ができるのがとても心地いい。今年はドバイ経由のエミレーツ航空を使用したが、例年になく順調であった。遅れなく、無事マプトに着いたが、内藤先生の持ち込んだケラトメーターの機材が lost baggage した。翌日には見つかったので検査も予定通り施行できた。

宝山さんもいつになくお元気そうで、宝山さんのお顔をみるとモザンビークに来た、アイキャンプで手術をしに来たと気持ちが引き締まる。

今年からシャイシャイの病院に赴任したモイゼス先生がある程度患者さんを選定して集めてくれていたこともあって、250 名近い白内障の患者さんが診察に来られた。しかも、ほとんどが過熟白内障であった。手術患者さんの選定などに当日苦戦せずに済んだのはモイゼス先生の力が大きいかと思われる。

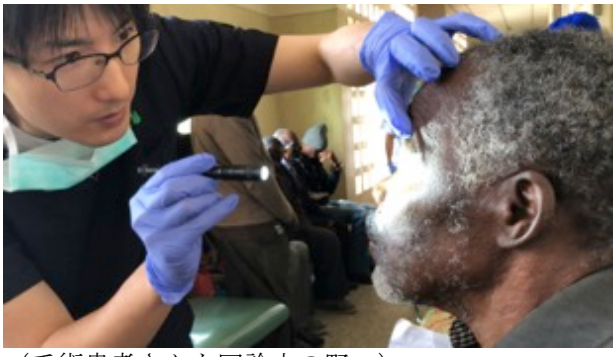
手術開始時、効いているはずの球後麻酔が効いていなかった。球後麻酔はモザンビークの研修医の先生に指導してやっていただくのだが、手術開始時間や手技的な問題で効いていなかったようだ。一例目から非常にたいへんな思いをして手術開始となった。しっかりと洗礼を受ける形となった。手術には器械出しの看護師さんもいないので自分で器械を自分で並べて、やるのだが、一年ぶりなので、どうだったっけ？と思い出しながらのスタートであった。オペが始まってしまえば、手術モードに入り、記憶がよみがえってきた。症例数が多いため手術は短時間で、安全にそつなくこなすことを心がけた。6～7 ミリの切開をおいている訳だが､縫合をせずに創閉鎖を得るようにすることが最も重要であるといつも思いながら手術を行っている。今回も縫合を要した患者さんは 1 例のみで他は全例無縫合とすることができた。

術後眼帯をとったときの患者さんの喜びかたは日本では経験することのないほど大喜びされる。眼帯をとると、握手されたり、踊り始めたり、歌を歌い始めたりする。今年印象深かった患者さんは眼帯をとったあと、うれしくて号泣された患者さんだった。両眼とも白内障で失明されていて、自分の人生をあきらめておられたようである。術後に私たちの顔が見えるようになって、信じられなかったと泣いていたのだ。このような手術があることをモザンビ

ークの人たちは知らない、是非来年も手術しにきてほしいと多くの患者さんから言われた。長時間のフライト、夜遅くまでの手術の準備、手術などとてもたいへんであるが、この瞬間のために、来ていると行って過言ではない。医師をやってきてよかったと思える瞬間である。

毎年、JICA の方々にお手伝いいただいているが、今年も 4 人の方に来ていただいた。JICA の方とお話をしたり、その働きぶりをみていると心が洗われるように思う。20 代の若い女の子が海外支援のボランティアのために、決して安全ではないモザンビークに一人暮らしをしているのである。家族や友達が恋しく、涙することもあると聞いた。なかなか普通では決心することはできないと思うが、それを実行している JICA の方々はすごいなぁと毎年痛感する。今年の 4 人もやはり同じで、知り合い、話を聞かせていただくことができてとても光栄である。
田上先生はムードメーカーでとてもこだわりのあるお話しなどしていただきとてもおもしろかった。手術もそつなくこなしていただき、とても助かった。今年も医師として、人として非常に多くのことを学び刺激を受けたアイキャンプであった。

多くの AOSA をご支援していただいている方々のおかげで今年も無事にアイキャンプを成功できましたこと感謝申し上げます。


（手術患者さんを回診中の野口）

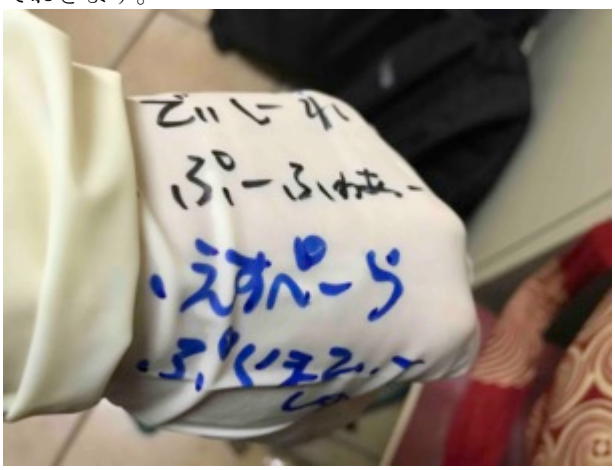
## ２回目の XaiXai アイキャンプ
## 山王台病院付属眼科・内科クリニック
## 看護師 沼田　美紀

今年も無事に 220 人(222 眼)の手術が出来ました。毎日、今日は何人手術と決まっていたので準備はしやすかったのですが、手術内容(全身麻酔が同日 2 件)によって人数を調整したいこちら側の意見は通りませんでした。

XaiXai の病院は 2 回目ですが、やっと外来の診察室と手術室の場所が理解できて迷わず動けるようになりました。日本の病院は一つの建物に集約されている事が多いと思いますが、あちらの病院は外来の診察室の棟、入院患者さんの部屋の棟など、一階建ての建物(長屋？)が渡り廊下で次々と繋がっている感じです。あちこち曲がりながら進むので、繋がりと位置を覚えないと思わぬところで遠回りしてしまったりするのです。(ちなみに私は日本ではやや方向音痴くらいです。)

病院のスタッフは、朝早くにオートクレーブを仕上げて出してくれてから夜終了後の機材の滅菌を入れるまで待機してくれます。OPE 終了後に「滅菌早く頂戴」と催促するのはどこも一緒だなぁと思ったりします。私達が帰ってから部屋の掃除もしてくれます。今回は初めて術後の眼帯の患者さんを見て、眼帯に使うガーゼの大きさにガーゼを切ってくれました。そもそも、ガーゼは心棒に巻かれた大きなものを手の空いた時間にある程度の大きさにハサミで切って折りたたみ準備しておくものなのです。パッキングされた 4 折や 8 折しか知らないと想像し難いかもしれないですが、ガーゼの準備も結構手間のかかるものなのです。それなので、いつも「たくさん頂戴」としか言わないのですが、自発的に動いてくれたその事がとても嬉しかったです。(ただし、どのカストに入っているかはわからない…)

海外での活動を行っていると言った時に大体誰からもある程度同じ事を質問されます。その内の一つは「言葉はどうしているの？」です。私は患者さんに対しては基本日本語を話します。ポルトガル語も現地語も分からないので JICA の方々に全てお任せです。意味の分からない言葉を使うより理解している日本語を話している方が伝わる感じがするからです。言葉に含まれるニュアンスが通じると言ったほうがいいのかもしれません。お互い伝えよう受け取ろうとしているからかもしれませんが、単純な事は案外伝わります。挨拶などは出来るだけ現地の言葉を使います。外来でも単純なものは使いますが、すぐ分からなくなるので最近は手袋に書くようになりました。だいたい「眼を開けて」「見える？」をベースに「痛い？」「まってて」などのポルトガル語や現地語の単語をいくつかその日ごとに書いておきます。


（手袋に書いたメモ）

現地の言葉を使っていると患者さんの家族が発音を直してくれたり、ポルトガル語で話しかけたものを現地語で患者さんに言ってくれたりちょっとした交流がいくつも生まれます。なかなか楽しい時間です。毎年ちょっとずつ覚えた単語が増えると嬉しいなとゆるい目標は持っています。ちなみにXaiXaiの現地語(シャンガナ語)のありがとうは「カニマンボ」覚えやすいので一度目に行った時に覚えました(使っていて何となく楽しい言葉です)。

ただ、 今回一番印象が強く残ったのは活動ではなく移動中のホテルでの出来事でした。ホテルはセキュリティの良いところを選んでいただいています。カードキー(もちろんオートロック)のホテルだったのですが、チェックインをして部屋に入ろうとドアを開けたら別の人達が就寝していました。部屋は変えてもらいましたが「あり得ない！」という私の感覚と「あ、そう」くらいのホテルのスタッフの対応に、例えホテルでも部屋への出入りはこんなにゆるいのかと実感しました。改めて自分の荷物はきちんと管理し、部屋の内側のロックをしっかりとかけようと思いました。今まではスーツケースを広げたまま部屋を出たりしていたのでこれからは気を付けようと思います。

最後に活動を支援してくださっている皆様ありがとうございます。一緒に活動した皆様ありがとうございました。いつも快く送り出して下さる職場の皆様ありがとうございます。今後も活動に関わって行きたいと思っています。

## 「ちょっと疲れました」

モザンビーク　宝山　晶子

１１回目のアイキャンプは、２０１８年６月、モザンビーク南部ガザ州のシャイシャイ病院で行われ、２２０人が白内障手術の恩恵を受けることができた。非常に喜ばしいことなのだが、コーディネーター役の私にとっては疲れたというのが実感だった。

まず、日本から船便で２月に送ったはずの医療器具等が、一部は５月初めに着いたのに、残りが着かないというハプニングがあり、待ちに待った末、活動の日の間際にようやく着き、はらはらの連続だったことだ。

また、モザンビーク側で荷物受取の保健省の担当官が、賄賂ほしさに、こちらに不当なカネを要求してきたことだ。こういうことには慣れているとはいえ、悲しい気分にさせられた。

さらに、眼科医一行がモザンビークに到着後に一泊するホテルを予約していたのだが、あとでそのホテルに連絡をいれたら、予約されていないことが判明、急遽別のホテルに予約を入れなおした。

また、首都マプトからシャイシャイまで一行を運ぶバス会社を予約していたのだが、よく調査してみたら、適切な運営をする会社でないことが判明、間際になって、急遽別のバス会社に予約しなおした。

また、一行がプロジェクトを終えたあと、休養できるホテルを探したが、予約がなかなか進まず、間際になってやっと予約が完了したことだ。

あれやこれやで、一筋縄ではいかない現実がいくつもあった。だからといって、これで参っていたのでは、事は進まないと自分に言い聞かせ、何もなかったかのようにすべてを飲み込むよう自分を訓練した。

（梱包中の宝山）

## 初めてのアイキャンプ活動報告

種子島医療センター　眼科　田上 純真

内藤先生のご厚意により、2018年のAOSAモザンビーク アイキャンプに初めて参加させて頂きました。たまたま眺めていた眼科情報誌に内藤先生チームの活動報告が掲載されているのを見て、若手の頃から一度は行ってみたかったアイキャンプへの思いが呼び起こされたような形になり、思い切って希望を出し、参加することになったのです。長時間のフライト、もちろん初上陸のアフリカ大陸、日々の診療ではあまり適用されない術式。全ては初めての経験であり、日常では感じないような緊張を抱きながらの出発でした。シャイシャイへ到着し、直ちに資材の搬入、集められた患者さんの診察、術前検査を行い、翌日より手術開始となりました。内藤先生、長澤先生、三太郎先生。石飛さん、沼田さん、宝山さん。現地眼科医のモイゼス先生。コミニュケーションをフォローして下さるJICAの現地派遣員さんたち。皆さんの素晴らしいチームワークによって医療活動はよどみなく、円滑に進んでいきます。私はなんとかお手伝いできることを探してオロオロしながらの参加でした。チームの皆さんはそれでも自分を暖かく庇って下さって、本当に情けない思いでいっぱいでした。肝心の手術、無縫合ECCEですが、3名の先生方の手技は想像をはるかにしのぐ芸術的なものでした。沼田さん、石飛くんのサポートも素

晴らしく、正直圧倒され、見とれているばかりでしたがそれではいけないと、なんとか自分にも当ててくださった手術に取り掛かりました。そして自分の技量の無さにひたすら失望しましたが、3日目、なんとか自分の手術のリズムを作る事が少しできるようになりました。嗚呼、もっと早く慣れられたらよかったのに。全ての症例が終了し、撤収作業に取り掛かるとき、自分には今までにない達成感と、心残りが入り混じった感情がこみあげました。手術翌日の朝眼帯を取り、視機能を取り戻したモザンビーク の患者さんたちの喜ぶ姿や笑顔。マジで魂を揺さぶられます。もう一度、自分のパフォーマンスを上げて、先生たちに少しでも近づけるような仕事をしたい。帰国の道中、来年はもっと！という気持ちに至ったので、忘れないようにしようと思いました。全てを準備し、マネジメントし、私の参加を許して下さり、また私の技量の無さを許して下さった内藤先生には感謝と尊敬しかありません。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（診察中の田上）

## ６回目の海外医療支援活動
## ツカザキ病院　視能訓練士　石飛直史

今年もモザンビークの大地を踏むことができました。今年で6回目となるアフリカ医療を支援する会の活動に参加することができてとても感謝しています。今年は222眼の手術を行うサポートをすることができました。活動のたびに思いますが、患者さんの失った光を取り戻した様子を見るたびに尊い活動に参加させていただけていると改めて思います。

私は普段視能訓練士として眼科外来では患者さんの眼の検査をすることを主な業務としています。モザンビークでも、現地XaiXaiの州立病院に着き準備を行った後に、まずは眼科の検査から始まります。内藤先生が患者さんの眼が手術の適応かそうでないか判断し、適応だった患者さんの検査を行っていきます。この手術前の検査を行うことで、手術で白く濁った水晶体（白内障）を取り出した代わりに眼の中に入れる『眼内レンズ』の度数を算出することができます。日本では1人の患者さんに様々な検査を長時間にわたって行い、眼内レンズ度数を決定します。しかしながら、モザンビークでは時間の制限があり検査の機械の数が少なく、スタッフの数少なく、さらに、圧倒的に患者さんの数が多いため、必要最低限の検査のみ施行することになっています。現地で行う検査はたった2つだけです。眼のカーブを測定するオートレフケラトメーターと眼の長さを調べる超音波眼軸長測定A modeです。毎年、この2つの検査を眼科医の長澤先生と野口先生と共に分担しながら行っています。

私は主にオートレフケラトメーターの測定を行いました。日本ではすぐに終わる検査ですが、なかなかスムーズに行うことができません。まず患者さんは全く見えないので検査台に座ってもらうことが一苦労です。そこから検査の機械の中を真っすぐに見てもらわないといけないので、見てもらうこともまた一苦労となります。活動に一緒に同行してもらっているJICAの方々に公用語のポルトガル語で言ってもらってもほとんど通じません。患者さんの大多数は普段現地の言葉で話しているからです。そこで、一生懸命身振り手振りを加えてどうにか真っすぐに見てもらい検査を行う訳です。患者さん1人でも時間を要することになりますが、これを200人以上検査を行うので本当に大変でした。幸いにも、今年は種子島で眼科を開業されている田上先生が新しく活動に参加していただいていました。田上先生と分担しながら、オートレフケラトメーターの検査を行うことで随分とスムーズに検査を行うことができました。また、田上先生に検査をしていただけたお陰で周りのサポートも同時に行うことができました。ボランティアしていただいた方々に患者誘導や超音波検査で使用する点眼のサポートのポイントをお伝えしたり、患者さんの検査待ちをする為の椅子を現地病院スタッフを通じて準備をしたり、空いた時間を利用して活動記録用のカメラを回すこともできました。活動参加当初の頃は自分がやらないとばかり考えていましたが、今年は一緒に活動している方々の協力をお借りしながら患者さん全員の検査を完了することができたように思います。こうして周りの方々と協力しながら仕事を進められるようになったことがAOSAを通して自分自身が成長できたことだと思いました。

その後、三日間の長時間にわたる手術を終え活動は終了しました。次々と患者さんの手術を行っている先生方の集中力と体力、精神力は改めて凄すぎだと思いました。加えて、3台の手術台がスムーズに手術できるようにサポートされている看護師の沼田さんは精密さや繊細さは圧巻でした。先生方や沼田さんから今年もまた多くのことを学ばせていただきました。

手術翌日は楽しい悲鳴がたくさん上がりました。眼帯を外した後に先生が患者さんのリアクションを確認すると、患者さんがカニマンボー、カニマンボーと現地の言葉で感謝の言葉をたくさん伝えてくれました。中には踊りだす方や涙する方もいました。こんなにたくさんの心からのありがとうを言ってもらえる瞬間は、多分他にはないと思います。活動中は大変なこともありますが、この瞬間を楽しみで頑張ることができました。

（検査中の石飛）

今年最も印象的だったのは現地の眼科医のモイジェス先生が手術をお1人で完投されていたことです。過去のAOSAの活動にも帯同されている熱心な先生です。まだまだ眼科医の少なく手術環境が整っていないモザンビークで相当な責任感や使命感を持って活動に参加されたことと思います。これから先、モイジェス先生の他にも手術をされる先生が少しづつ増えていくことになると思います。その際に、手術ができる先生だけではなく検査する人が当然必要になってきます。私ができることは少ないですが、現地に技術の伝承ができるよう少しでも協力していけたらと考えています。

今年もまた多くの貴重な経験をすることができました。最後になりますが、このような長期間に及ぶ活動に毎年参加させていただいているツカザキ病院の職場環境や眼科スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

## アイキャンプ参加報告

**青年海外協力隊　植原　正雄**

ここシャイシャイで２年近く暮らしていると、こちらの医療の現実というものを多少なりとも身をもって実感することがあります。今回、私の現在の住まいから徒歩と乗り合いバスとで計２０分程の、シャイシャイ州立病院にてアイキャンプが開かれました。この病院でも、日本であれば回復出来るのであろう、救えるのであろう人達が成すすべもなく希望の光を失うような、それを運命と受け入れるしかないような現実が、日々起こっているのだろうと想像します。アイキャンプによる手術が行われた同日・同時刻にも、他のオペ室にて悲しい出来事があったとの話を後日聞きました。恐らくここではそれが日常なのだろうとすら感じてしまいます。

そういった煮え切らないような思いもあり、門外漢ながら少しでもお手伝い出来ることはないかと今回アイキャンプに参加させて頂きました。参加させて頂くにあたり、現在の住まいから目と鼻の先の病院で開催されたことは私にとって幸いでした。

私自身初めて体験する手術現場の緊張感（私が勝手に緊張していただけかと思いますが）や、手術がついにスタートし、このアイキャンプという活動の意味合いの重さへの実感が湧き上がってきたこと等から、手術初日の夜は中々寝付けませんでした。また、翌日の朝病院にて、回診で多くの患者さんが喜んでいる姿を目にしたことも、アイキャンプの活動の意義の大きさ、インパクトというのを、多少なりとも私なりに実感することが出来た場面でありました。

手術日は計３日間あり、各日その翌日朝に回診が行われましたが、少なくとも手術を受けて視力を取り戻された方々、更にはその患者さんと近しい方々にとって、奇跡にも等しいような大きなインパクトが、ここシャイシャイで今起きているんだなと感動しました。

今回参加させて頂いたアイキャンプも今年で活動１１年目ということで、その経験値は流石だなと驚嘆しました。私を含め５名のＪＩＣＡボランティアを受け入れて頂き、私のような素人でも決して負担になり過ぎないよう、手術をより良く進めるために細かくサポート、オーガナイズして頂きました。

（患者さんを誘導中の植原）

私の勝手なイメージで恐縮ですが、アイキャンプの父・内藤先生、アイキャンプの母・宝山さん（リンゴやジュース等の差し入れもありがとうございました）、患者の方を手術台へ寝かせる姿が素敵な紳士・石飛先生、気合の三太朗先生、大人の色香・田上先生、ベテランの余裕・長澤先生、決して座る

ことのない tough woman・沼田先生。また、シャイシャイで暮らす私とは違い、わざわざ他地域から駆け付けられた４名のボランティアの方々、それに、熱心にオペの現場に携わっていた、モザンビークのモイーゼス医師。この度は貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。日本を代表して任国にて活動しているという誇りのようなものを、より一層感じることが出来る機会ともさせて頂けました。お忙しい中活動に取り組まれている皆様のご健康と、アイキャンプの今後の益々のご発展を願っております。

## アイキャンプ報告

青年海外協力隊　　葛巻　あゆみ

JICA から届いた白内障手術のお手伝い募集のメール。仕事内容は「患者さんの誘導など」とだけ記載してあり、具体的なイメージはあまりできませんでしたがすぐに参加したい！と感じました。

実際に AOSA の皆さんと活動させて頂いた 1 週間は、私の人生において素晴らしい財産となりました。その中で特に印象的だったことは３つあります。

１つ目は、３日間で 200 名以上の手術をこなす先生方の姿です。長旅の疲れや、時差もあいまって体力的にはかなり厳しかったのではないかと思いますが、みなさん朝から晩まで集中力を切らさずに手術をされていました。患者さんを救うため黙々と任務を全うする姿を見て、まさにプロだなと感じました。

２つ目は手術後の患者さんの様子です。包帯をとった後、多くの方が喜びを歌や踊りで表現するのを見て、胸が熱くなりました。ある男性の「本当によく見えるようになった。こんな日が来るとは思わなかった。この国の人は、こういった手術があることをみんな知らない。一度視力が悪くなったら、そのままにすることしかできないと思っている。これからもぜひこの活動を続けて欲しい」と涙ながらに語った言葉は特に印象に残っています。患者さんにとって人生が変わるほどの貴重な瞬間に立ち会えたこと、そして自分がそのお手伝いを少しでもできたことはとても光栄なことでした。

3 つ目は、私の語学についてです。私は普段ポルトガル語を使って仕事をしています。ですが、モザンビーク人とのやりとりの中でまだまだ自分の語学力の不足を感じることが多くあります。ネイティブと仕事をする上でお世辞にも十分なレベルではないと、日頃から勉強の必要性をひしひしと感じていました。

ですが今回通訳をやる中で、色々な方から感謝のお言葉を頂いて、私のポルトガル語のレベルでも人の役に立つことができるんだ、と気付くことが出来ました。それは新たな発見でもあり、喜びを感じた瞬間でもありました。今まで苦労しながらも勉強してきて良かった、これからも更に頑張ろうと思いました。

また余談ですが、まさに今手術が始まろうとしている男性の患者さんが他の女性の協力隊員に「君が好き、結婚しよう」と言っていました（もちろん初対面）。私も普段からよくそのようなことは言われますが、まさか手術直前にも言うとは…。モザンビーク人の恋愛に対する情熱は本物だと感じました（笑）。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった AOSA の皆様、コーディネーターの宝山様に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（優しく患者さんの手に手を添える葛巻）

## アイキャンプに参加して

青年海外協力隊 塚原 早祐佳

今回シャイシャイで行われたアイキャンプに初めて参加させていただきました。例年モザンビーク北部もしくは中部の病院での開催と聞いていたので、自分の活動地から参加可能な南部シャイシャイでの開催と聞いたときは非常に嬉しかったです。と同時に普段は地域の農家さん相手に活動している自分がこれまで全く経験の無い病院という現場でどこまでお役に立てるのかと不安も覚えました。

アイキャンプ初日、日本から来てくださったアフリカ眼科医療を支援する会のみなさんは大変気さくに迎えてくださり、慣れない医療現場での作業を丁寧に教えていただきました。初日に機材の搬入や手術室の準備を整えると、2 日目以降の検査や手術は慌ただしく過ぎていきました。まず一番に驚いたのが患者さんの数です。私は待合室から診察室への誘導、診察後の薬の受け渡しをお手伝いさせていただいたのですが、待合室と診察室を何度往復しても患者さんが途切れる気配がありません。また待合室

ではどこに住んでいるの?と聞いてみると病院のあるシャイシャイから2時間以上かかる町からバスを乗り継いで来た患者さんもいて、ここモザンビークでの眼科医療に対する切実なニーズを垣間見ることとなりました。術後の患者さんに薬を渡す場面では、見えるようになったことをジャスチャーたっぷりに喜んでくれる人、その場でダンスのステップを踏み出す人ととにかく全身で嬉しい気持ちが伝わってきて、これまでに感じたことない充足感を感じました。

最後になりましたが、今回参加の機会をいただいたアフリカ眼科医療を支援する会のみなさん、そして現地コーディネーターの宝山さんに改めてお礼申し上げますモザンビークということばも文化も日本とは全く異なる環境で、眼科治療にあたることは並大抵のことではありません。そんな中で連日粛々と患者さんに向き合い、現地のスタッフと協働する姿勢には大変感銘を受けました。今後のアイキャンプの活動の継続、またモザンビーク眼科医療のさらなる発展を願ってやみません。

（患者さんを誘導中の塚原）

## アイキャンプ報告

**青年海外協力隊員　　庭野晴香**

青年海外協力隊の庭野と申します。以前先輩隊員よりアイキャンプについての話を聞き、興味を持っていましたので、今回念願叶っての参加となりました。しかしながら、私は今まで医療の現場で働いた経験はなく、そんな自分が何か役に立つのか、少し不安に思う部分はありました。

私が今回のアイキャンプを通じて、印象に残ったことは3点ありました。

まず1点目は、白内障の患者さんの多さです。私は普段、首都マプト近郊の村で活動をしているのですが、これまで白内障を患った方と出会うことはありませんでした。そのため、今回アイキャンプが実施されたシャイシャイ近郊だけで、こんなにも多くの白内障の患者さんがいることに驚きました。（おそらく、今回病院に来ることができなかった方も少なくないと思うので、実際はさらに多くの患者さんがいると予想されますが。）

2点目は、AOSAスタッフの皆様の仕事の迅速さとチームワークです。私たちの主な仕事は患者さんの誘導で、あくまでもAOSAスタッフのサポートという形でしたが、その仕事でさえ決して楽だとは感じませんでした。しかしながら、AOSAスタッフの皆様は限られた日数で全ての予定終わらせるため、朝から夜までほとんど休むことなく手術や処置をされていて、その集中力と体力は本当にすごいと感じました。

3点目は、手術翌日に患者さんの眼帯が取れ、目が見えるようになった瞬間に立ち会うことができたことです。患者さんのほとんどは両目とも白内障を患っており、今回片目を手術したことによって、何年かぶりに目が見えるようになったという方でした。私たちの顔が見える、色がわかる、文字が読める、と中には涙を流したり、踊りだしたりして喜ぶ姿はとても印象深かったです。

（患者さんを誘導中の庭野）

今回、このようにとても貴重な機会をいただき、ありがとうございました。参加前は自分が果たして何か役に立てるのか不安な気持ちが大きかったのですが、参加後感じたことは、ほんの少ししか役に立てなかったかもしれませんが、何よりこんな貴重な経験をさせていただいたことについて、AOSAスタッフの皆様、宝山さん、今回手術を受けた患者さん含む関わったモザンビークの人たちへの感謝の気持ちでした。今後もアイキャンプの活動が続いていくこと、そして、モザンビークの眼科医療の発展を心より願っています。

## アイキャンプ報告

**大学生　佐門慧苑**

現地コーディネーターの宝山さんの紹介でAOSA

の活動に参加させてもらいました。まさかこのような活動に参加できるなんて思ってもいなく何もできないただの学生が参加しても大丈夫なのかと心配や不安でいっぱいでしたが国際ボランティア、国際協力の現場というものを直接見るとこができすごく良い経験になりましたし勉強になりました。モザンビークには眼科医がとても少ないという事、都市部に医師が集中していて農村部に医師が不足している事、その他モザンビークに来ないと知ることのできないような実情も知ることができました。シャイシャイの病院には白内障の患者さんがたくさんいらしていました。モザンビークでは横のつながりが強く、白内障手術が無償で行われるという噂はすぐに広まるそうで、これはモザンビークならではのことではないかと思いました。集まった 220 名の患者さんは高齢の方が多かったですが、中には子どももいました。

人のために生きる、社会に貢献するというのがどういうことなのか教科書で読む、授業で聞くだけの事柄ではなく、現実として見るとこができました。何事も事柄や結果だけを見ると「かっこいい、すごい、自分もしたい」と思ってしまいますが、その活動の中身は地道だったり草の根活動であったり成果がすぐに目に見えるわけではありません。しかし、小さな活動が世界を動かしているんだなと思いました。国際ボランティアは国連がすべてではない、大きい組織だから素晴らしいという事ではないと気づかされました。この 1 週間はそのようなことを考える時間でもありました。

（手術患者さんと佐門）

この活動に参加させていただき本当にありがとうございました。たくさんの刺激をもらいました。AOSA の活動の経験を経験だけにとどまらせず、この経験を踏まえ人の役に立つような大人になっていきたいなと思います。また、AOSA でのすべての出会いに感謝します。ありがとうございました。

## Ⅲ．2018 年度事業報告

### “アフリカ眼科医療を支援する会” 第 11 回支援プロジェクト モザンビーク眼科医療支援 2018

**（１）事業実施状況**

2008 年からの 10 回の支援プロジェクトの成果をもとに第 11 回支援プロジェクトを立案し実行した。

2017 年 6 月 7 日～11 日の間、モザンビーク共和国南部のガザ州シャイシャイに滞在してシャイシャイ病院にて、眼科医療支援活動を行った。日本人スタッフは眼科医師４名、看護師１名、視能訓練士 1 名、ボランティアスタッフ４名、現地コーディネーター１名、合計 11 人の日本人チームとモザンビーク人眼科医３名のチームで地元眼科医が集めた患者さん約 250 名を診察し、白内障手術適応患者 220 名を選択し手術を施行した。手術は両眼失明患者を優先した。

**（２）事業計画中に生じた課題等と対処内容**

① 2017 年の第 10 回支援プロジェクトの結果をもとに、さらに発展的にプロジェクトを企画した。手術件数は 220 件で当初の目的数の 200 件を上回り、目的以上の成果を達成した。しかし、患者数が多すぎ、比較的症状の軽い患者さんには遠慮してもらった。これらの患者さんはアイキャンプ後モザンビーク人眼科医が対処する。

② 今回もモザンビーク人眼科医師の参加により大変助けられた。特に手術中の患者さんにとって、部族語で声をかけることは重要である。また、ポルトガル語に堪能な日本人スタッフが多数参加することでスムーズに仕事ができた。特に青年海外協力隊の皆様の活躍は大きい。手術介助では看護師が大きな役割を果たしてくれたが、一人の看護師だけでは疲労が溜まりやすい。

③ 医療機器の不備があったため今回高額医療機器（ポータブル・オートレフケラメーター）を新規購入した。

（新規購入したポータブル・レフケラメーター）

これにより眼内レンズの選択がより正確になった。医療資材の不足もあったが代用品で対処した。出来るだけたくさんの医療資材を携行したいが限界がある。

### （３）事業の成果

今回の最大の成果は、我々が技術指導してきたモザンビーク人眼科医が独り立ちしてシャイシャイ病院に赴任し、彼と共にアイキャンプができた事である。

白内障手術に関しては、220 名の白内障手術を行うことが出来た。手術結果も良好で、概ね満足できる成果を上げることが出来た。回数を重ねることにより相互理解が得られ、今後の活動はさらに発展すると思われた。

今回も前回同様、２名のモザンビーク人眼科医師を招待し、技術指導と情報交換を行えたことは大変有意義であった。現地医師の今後の活躍を期待し、我々のプロジェクトへの参加招聘は継続していく予定である。また看護師、視能訓練士の参加により質の高い医療が円滑にできている。今後もコメディカルの参加依頼を継続していく予定である。

### （４）広報活動など

①当会のホームページを更新した。さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信しつつ、充実したものに改善した。( http://aosa-eye.org )
②我々の活動を広く理解して頂くために、広報活動を行った。第 18 回新潟医療福祉学術学会で石飛が講演した。徳島プリンスロータリークラブ例会（2019 年３月１日）で内藤が活動内容を講演した。また、日本経済新聞（夕刊）のコラム「人間発見」に内藤を紹介する連載記事が掲載された。(2018 年６月 25 日～６月 29 日)

（手術後の患者さんたち）

## Ⅳ．2018 年度　会計報告

### 収入の部

| | |
|---|---|
| １．寄附金 | 1,235,090 |
| ２．助成金＊ | 1,100,000 |
| ３．繰越金 | 2,770,954 |
| ４．利息 | 16 |
| 計 | 5,106,060 円 |

＊ 助成金内訳

| | |
|---|---|
| 日本眼科医会 | 500,000 |
| 徳島プリンスロータリークラブ | 300,000 |
| 徳島新聞社会文化事業団 | 100,000 |
| 徳島県眼科医会 | 100,000 |
| 徳島大学眼科同窓会（黒瞳会） | 100,000 |
| 計 | 1,100,000 円 |

### 支出の部

支出項目

１．第 11 回モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

| | |
|---|---|
| 白内障手術器具・医薬品等 | 2,131,556 |
| 現地購入医薬品等 | 429,134 |
| 渡航経費補助 | 400,000 |
| 現地滞在費等 | 118,000 |
| モザンビーク人眼科医滞在費 | 50,000 |
| 現地日本人ボランティア旅費滞在費 | 95,000 |
| 現地物品輸送費 | 68,000 |
| 雑費 | 5,150 |
| 計 | 3,296,840 円 |

２．その他

| | |
|---|---|
| 日本眼科国際医療協力会議会費 | 50,432 |
| 印刷代（会報など） | 230,432 |
| 送料 | 167,095 |
| 雑費 | 27,301 |
| 計 | 475,260 円 |

| | |
|---|---|
| 総支出合計 | 3,772,100 円 |
| 次年度繰越金 | 1,333,960 円 |
| 計 | 5,106,060 円 |

## Ⅴ．2019 年度事業計画
## （2019 年４月１日～2020 年３月 31 日）

**“アフリカ眼科医療を支援する会”**
**第 12 回支援プロジェクト**
**モザンビーク眼科医療支援 2019**

### １．事業の趣旨及び目的

過去 11 回の支援プロジェクト結果をもとに第 12 回支援プロジェクトを計画した。

① モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

② 人口 2400 万人に対し､眼科医は 20 名にすぎず、危機的状況である。本年度のアイキャンプでは過去にアイキャンプで技術指導した眼科医がアイキャンプ実施病院に就職している。彼の技術の上達状況を確認し、彼が独自に活躍出来るようにバックアップしたい。さらに、現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、奨学金等の資金的援助を検討し、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。引き続き ABE イニシアティブに参加表明し眼科技術者の養成を計画している。

③ モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

### ２．事業の内容

去年と同様に､｢モザンビーク共和国保健省｣と｢アフリカ眼科医療を支援する会｣との共催でプロジェクトを行う。｢モザンビーク共和国保健省｣は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師・看護師･眼科助手などの病院スタッフを動員し､我々NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。｢アフリカ眼科医療を支援する会｣は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

本プロジェクトは､｢在日モザンビーク共和国大使館｣､｢在モザンビーク日本大使館｣､｢徳島大学医学部眼科学分野｣､｢新潟大学医学部眼科学講座｣および現地で活動を行っている NGO｢モザンビークの学校を支援する会｣より支援・協力を受けている。

#### ① “アフリカ眼科医療を支援する会” 第 12 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からはガザ州シャイシャイでの活動要請があった。要請に従って 2019 年６月、シャイシャイにおいて、第 12 回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画している。現地に１週間滞在し、白内障による失明患者約２００名の手術施行を目標としている。今回は、日本人眼科医４名に加えて、我々が指導してきたモザンビーク人眼科医１名および眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフケラメーター、眼軸長測定器をフルに使用してより質の高い手術を行う予定である。

#### ② 眼科専門課程研修希望者の支援

モザンビーク人眼科医の育成が急務であり、この点をモザンビークの関係者に説明しているが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間 1－2 名のみである。長期的視野に立ち現地で指導するとともに、関係者とともに教育体制を改善するために意見交換をしている。国立エドアルド・モンドラーネ大学医学部眼科教授兼マプト中央病院眼科部長でモザンビーク眼科医のリーダーであるマリアーモ女史と協議し、毎年２名の専門課程研修医師をアイキャンプへ招待し技術指導を行なっている。さらに奨学金を検討しているが課題は多い。

### ３．現地支援活動計画日程

2019 年６月に支援活動を実行する予定である。

6/11 日本発
6/12 モザンビーク入国、マプト泊
6/13 シャイシャイへ移動、シャイシャイ泊
6/14～6/17 眼科医療活動
（患者診察・白内障手術）
6/18 マプトへ移動、マプト泊
6/19 帰国の途に
6/20 帰国

### ４．事業の長期展望

#### （１）現地の協力

根本的な医師不足のため、特に地方においては病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受けている。そこで、我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが重要である。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を啓蒙することが出来るようになってきた。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に奨学金等の資金的援助を行い、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成を支援する必要がある。また大学での手術教育の改

善強化を試みる必要がある。
　これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を強化する必要があり、引き続き連携していく予定である。

（２）将来展望と資金計画
　アイキャンプを継続して行うことで、モザンビーク保健省との信頼関係がより強固なものとなって来た。今後現地の意見を聞きながらさらに発展させて行く必要がある。
　モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。特にモザンビークにおける医療機器の管理体制を強化する必要があるため、ABE イニシアティブに賛同し、眼科技術者の養成を計画している。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく予定である。将来的には徳島大学と現地大学との大学間協定締結やJICA プロジェクト等への申請も考慮していく。

広報活動など

　我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。
①ホームページの充実
　広報活動にホームページは不可欠であるため、今年度はさらにホームページを徐々に充実させる予定である。また動画サイトへの投稿なども積極的に行って来たがさらに充実させる予定である。

②眼科学会等での発表
　昨年度と同様に眼科関連学会等のインストラクションコース等で発表予定である。

## Ⅵ. 2019 年度予算

### 収入の部

| | |
|---|---|
| 寄附金 | 1,200,000 |
| 助成金 | 1,000,000 |
| 繰越金 | 1,334,000, |
| 合計 | 3,534,000 円 |

### 支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

| | |
|---|---|
| 白内障手術器具等 | 500,000 |
| 医薬品等 | 400,000 |
| 渡航費補助 | 400,000 |
| 現地移動費等 | 200,000 |
| 現地滞在費等 | 500,000 |
| 雑費 | 150,000 |
| 小計 | 2,150,000 |

2. その他

| | |
|---|---|
| 印刷費 | 300,000 |
| 通信費 | 100,000 |
| 雑費 | 100,000 |
| 予備費 | 884,000 |
| 小計 | 1,384,000 |
| 合計 | 3,534,000 円 |

（白内障の患者さん。瞳の中が白く濁っています。）

（手術後にお孫さんの顔が再び見えて喜ぶ患者さん）

## Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

**（徳島県）**
糸田川　誠也、井上　須美子、猪本　康代、
江村　俊二、大石　美代子、大村　和正、賀島　誠、
金川　知子、兼松　誠二、鎌田　泰夫、川端　昌子、
木下　導代、工藤　英治、幸地　吉子、坂部　和代、
篠賀　健、篠賀　知代、塩田　洋、島　裕美、
髙橋　順子、武田　美佐、竹林　優、多田　糸図、
谷　貴美子、谷口　冨志子、内藤　毅、中西　淑子、
中山　寿子、仁田　美智子、秦　聡、秦　裕子、
林　英憲、福本　幸司、藤井　邦隆、保科　正之、
牧野谷　卓宏、松本　治恵、三河　洋一、
水井　研治、美馬　彩、村尾　史子、盛　隆興、
山口　景子、山田　修三、山根　伸太、吉浪　弘子、
吉村　久、和田　恵子
黒瞳会、コンセール合唱団、徳島県眼科医会、
徳島新聞社会文化事業団、
徳島プリンスロータリークラブ

**（香川県）**
赤澤　嘉彦、川口　博也、川口　みさ子、
小西　勝元、坂口　恭久、小路　竜一、谷　英紀、
西原　勝、三崎　昌史、吉田　慎一

**（高知県）**
内田　佳永、田内　芳仁、戸田　裕子、林　勇樹、
林　正和、山中　清香

**（愛媛県）**
木内　康仁

**（兵庫県）**
石飛　直史、馬詰　裕道、長澤　利彦、
野口　三太朗、沼田　愛、橋本　勝利、山崎　樹敬、
ツカザキ病院

**（大阪府）**
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、森　菊枝

**（滋賀県）**
尾崎　志郎

**（新潟県）**
阿部　春樹、荒井　紳一、山崎　イサ子、
医療法人社団仁悠会

**（東京都）**
社本　真紀、中川　和美、中屋　由美子、
早馬　由美子
日本眼科医会

**（茨城県）**
長井　恭子、沼田　美紀

**（埼玉県）**
柳川　隆志

**（鹿児島県）**
田上　純真

**（モザンビーク共和国）**
宝山　晶子

**（企業など）**
（株）アーガス・ビー・エム・シー、
エイエムオー・ジャパン（株）、
（株）エムイーテクニカ、（株）オーヒラ、
参天製薬（株）、千寿製薬（株）、日本アルコン（株）、
マニー（株）
（有）山口メディカル、
（株）リブドゥコーポレーション

（寄附頂いた医療物資等）

（手術準備中の沼田）

# アフリカ眼科医療を支援する会　定款

**第１章　総則**

名称

第1条　このNGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　英語名をAssociation for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　このNGOは、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町757番地
新潟大学医学部眼科学講座内

**第２章　目的および事業**

第4条　このNGOは、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと、および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことをNGO設立当初の目的とする。

第５条　このNGO設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

**第３章　会員**

第６条　会員の種別

・正会員　このNGOの目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　このNGOの設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　1万円
・団体　年会費　　5万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

**第４章　役員および選任等**

第10条　このNGOに以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問２名以上６名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第11条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第12条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

**第５章　総会**

第13条　このNGOの総会は、正会員をもって構成する。

第14条　通常総会は、毎年1回開催する。

第15条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

**第６章　会計**

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

**第７章　雑則**

第１８条　この NGO の役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　　徳島大学国際センター国際協力部門特任教授
副理事長：荒井紳一　　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　　東淀鋼材（株）会長
理　事　：長澤利彦　　ツカザキ病院
理　事　：沼田美紀　　山王台病院付属内科・眼科クリニック
顧　問　：阿部春樹　　新潟大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：塩田　洋　　徳島大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：福地健郎　　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：三田村佳典　徳島大学医学部眼科教授

（敬称略：50 音順）

第１９条　この定款は 2015 年 4 月 1 日、一部訂正し、これを施行する

（手術後の患者さんたちと記念撮影）